

ユムシ・イムシのルーツを訪ねて—動物和名の一考察

西川 輝昭

1. はじめに

後生動物の一門 Echiura, あるいは環形動物門の一綱 Echiuroidea の日本語呼称をユムシ類(ユムシ動物)とし、これに属する個々の種和名を一般に〇〇ユムシと呼ぶ方式¹⁻²⁾と、「ユ」ではなく「イ」、すなわち〇〇イムシなどとするもの³⁾とが現在併存している。本来、こういった日本語名称は「その形式、有効性に関して何等の規定もなきもので、徳義上の問題を度外視すればその命名、破棄等は全く自由である (p. 1874; 原文は片仮名)」⁴⁾。とはいえ、名称の安定に寄与する用法が望ましいことはいままでもない。

その点から見てこの動物群にどんな日本語名称を使用するのがよいかを考える必要に迫られて、私は数年前に、関係する名称のルーツをたどり近年における用例を調べたことがある。ちょうどその項目にした荒俣⁵⁾の、「和名ユムシはイムシ(総虫)がなまったもので、〈首くり虫〉という意味。姿が一見首を吊った人間を思わせるためか。… (p. 42)」という記事にも触発され、さらに調査を続けてきた。本稿では、本草書探索の若干の成果を中心に、結果の一部を報告したい。

2. 栗本『千蟲譜』を訪ねて

ルーツ探索の中心課題は、日本各地の内海砂泥底に多産し釣餌として古くから広く利用され、現在ユムシまたはイムシという和名がつけられている日本固有種 *Urechis unicinctus* (von Drasche, 1881) が、歴史的にどう呼ばれてきたか、である。

手始めとして、江戸中期の本草学者・栗本丹洲著『千蟲譜』(1811年完成後、没する直前の1833年まで増補)

Some Historical Considerations on the Japanese Ethnobiological Nomenclature of the Echiurans (Phylum Echiura)
Teruaki Nishikawa / Division of Informatics for Natural Sciences,
Graduate School of Human Informatics, Nagoya University

Keywords: *Urechis unicinctus*, Echiura, Japanese common name, Ethnobiological nomenclature, "Sentyūfu" by Kurimoto Tanshū, Tanaka Yoshio.

を見てみよう(この図譜については、磯野⁶⁾や中村⁷⁾を参照)。磯野が「より原本に近い写本」の一つとした愛知県西尾市岩瀬文庫蔵『栗氏千蟲譜』(登録番号745-46-38; 全3巻)を調べると、その下巻22丁表には *U. unicinctus* と思われる彩色図(7個体の外形図と1個体の縦断解剖図)が揚げられている(図1A)。添えられた解説文には、「順和名鈔謂之蝠蛸和名井 洲崎ノ三枚洲ト云処ノ沙場水浅キ処ニアリ二三尺ホリテ得之形蚯蚓[ミミズ]ノ如ク横紋ナシ…一頭ニ刺[肛門を囲む尾剛毛のこと]アリテ人手ヲ螫ス…腸沙ヲ去リ煮食美味ナリ…」と記されている。([]内は西川注記、以下同様)。引用文中「順和名鈔」とは源順著『倭名類聚鈔』のことで、次章でふれる。この解説文と図は、荒俣⁵⁾所載(p. 33)の栗本『千蟲譜』(4巻本、荒俣蔵)該当個所の写真版と、送り仮名などが二、三相違している以外そっくりである。念のため、岩瀬文庫本のこの箇所を恒和出版刊の影印本『千蟲譜』⁸⁾巻九(p. 472)と比較してみると、図については縦断解剖図が天地逆であり、外形図は2個体が省かれ計5個体となっている。説明文は、その大意に差はないが、「三枚洲」が影印本では「三又洲」となっている他、送り仮名などの細部で異なる。

いずれにせよ、栗本は *U. unicinctus* の和名として井(井), 漢名として蝠蛸を採用したことは間違いない。後の『大言海』⁹⁾も栗本と同じ解釈である。もっとも、蝠蛸の解釈に異見がありうることは、『千蟲譜』と同じころに成立した『動植名彙』にうかがえる(次章参照)。

他方、岩瀬文庫本『千蟲譜』下巻55丁表には「蝠即総女 和名ヲキクムシアマノジャキ…」という説明文があって、蝶か蛾の類の帯蛹らしいものが図示されている(図1B)。55丁裏と56丁表にも同様のものが「総女二種 俗ニクビクヽリ蟲ト云モノ是ナリ…」という解説文つきで図示されている。恒和出版影印本の巻二(pp. 101~102)にも、文字や図の配置はかなり違うとはいえほぼ同じ内容が見られる。冒頭で引用した

荒俣の「首くり虫」が想起される。このような帯蛹は吉田雀巢庵『虫譜』では「クビツリ」と呼ばれているという¹⁰⁾。ちなみに、明治になって出版された矢沢¹¹⁾の「鳳蝶」(アゲハチョウ)の説明文(p. 2)には、「蛹(縊女)」とあり、丸括弧内の漢字にオキクムシと振られていることから、この時代でも「縊女」が蝶・蛾類の蛹の意味で使用されていたことが分かる。なお、『大漢和辞典』¹²⁾では、蠶は縊に通じ、縊女(蠶女)はみのむしの意とする。

栗本丹洲にとって、「蠶」はキすなわち *U. unicus* とは全く別物であったことは、こうして明白である。明治以降今日まで、この種あるいはこの類全体に漢字をあてる場合、生物学関係の刊行物においてはほとんど常に「蠶」が使用されることとの食い違いについては、終章でふれたい。なお、蠶は国字とする説¹³⁾もあったが、たとえば『康熙字典』¹⁴⁾には蠶(読みはイ)

が掲載されているから(語義としては縊女のことだけ)、漢字に間違いはない。ついでながら、台湾の辞書『増修・辞源』¹⁵⁾では「蠶」の第1義が縊女、第2義が小文のEchiuraにあたる動物群(蠶虫動物とする)となっている一方、上海の『辞海1979年版』¹⁶⁾ではこの動物群の説明のみで「縊女」には全く言及されていない。語義のこのような変化は日本の用法の影響だろうか。なお、栗本をはじめ江戸本草学者に強い影響力を持った16世紀中国の著名な本草書『本草綱目』¹⁷⁾には、蠶も現れない。

3. 『倭名類聚鈔』から産物帳まで

栗本が上記『千蟲譜』で引用した『倭名類聚鈔』¹⁸⁾は、平安時代(931年)に出た日本最古の漢和辞典である。そこでは、『七卷食経』(岡西¹⁹⁾によれば、唐で出版された『新撰食経』のことで蠶蛸と呼ばれる「其貌似

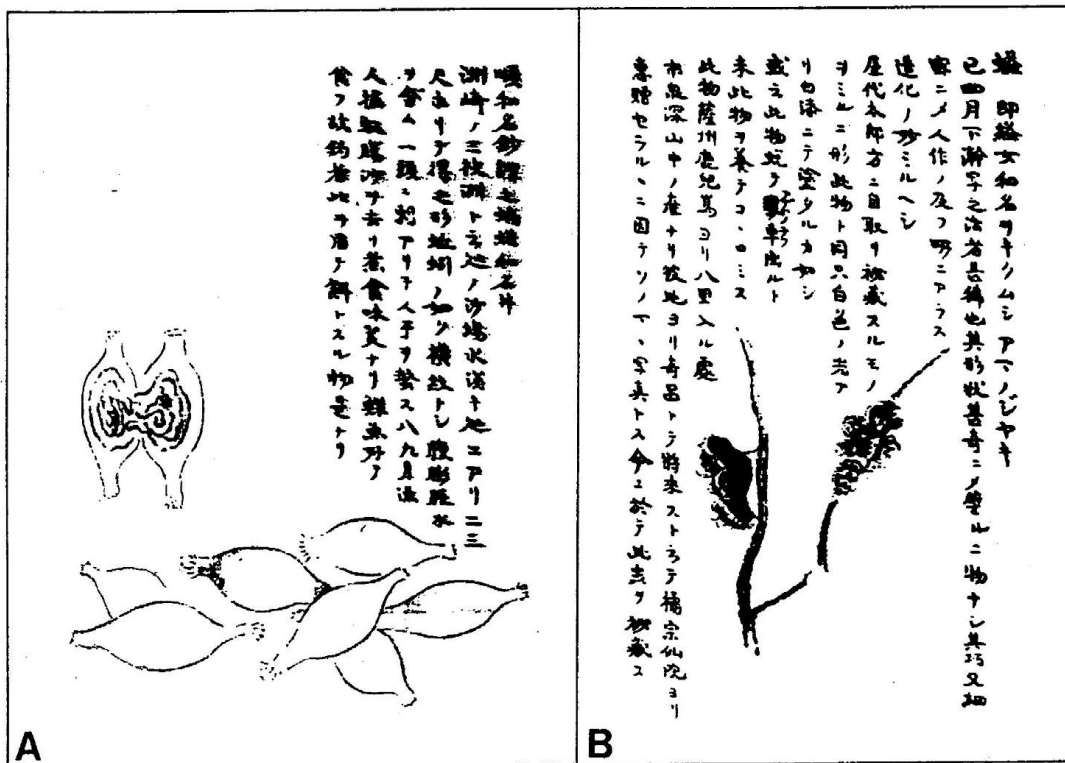


図1 『栗氏千蟲譜』下巻22丁表(A)および下巻55丁表(B)
詳細は本文参照。(愛知県西尾市岩瀬文庫蔵)

Fig. 1 Two pages in a hand-written copy of "Sentyūfu" by Kurimoto Tanshū, housed at the Iwase Collection of Nishio City, Aichi Prefecture.

Sketches and explanations of : (A) some specimens of *Urechis unicus* (von Drasche) inhabiting Tokyo Bay, and (B) some lepidopteran pupae.

蛎而大者」つまり「ミミズ(蛎)に様子が似た大きなもの」を、「和名為」という動物にあてている。また、918年に刊行された日本最古の本草書『本草和名』²⁰⁾はやはり『七卷食経』を引いて、蝙蝠が「大蛎」に非常に似ており、「和名委」であることを記している。為や委はキと読まれたのであろうが、この「大型のミミズに似たキ」は一体何にあたるのか。特徴の詳しい記載や図がないのでよく分からないが、栗本に従い *U. uncinatus* とすることも可能だろう。なお、同時代の『康類本草』²¹⁾にこの動物は全くふれられていない。他方、平安末期に成立したとされる『類聚名義抄』²²⁾には「蝙蝠…井」とごく簡単に述べている。また鎌倉初期に編纂された『伊呂波字類抄』²³⁾にも「蝙蝠 井 似白蛎而大者」と記述されている。

時代は下って、江戸時代初期の『本朝食鑑』²⁴⁾や『大和本草』²⁵⁾にはこれに相当する動物の記載は見あたらないが、八代将軍吉宗の時代に行われた日本列島全域にわたる生物相調査の記録であるいわゆる産物帳(安田²⁶⁾参照)ではどうか。『享保元文諸国産物帳集成』の既刊分²⁷⁾から、関係する項目を拾ってみると下記のとおりである。なお、「ゐ」には猪もあり、「い」には明らかに植物(い草の類)も含まれるが(たとえば信濃国、第III巻、p. 214)、以下ではこれらはもちろん除外してある。

「ゆむし」：越前国福井(I巻)の項に、クモ、カエル、尺取り虫などとも「虫類」として分類されるが、図や説明がなく正体不明である。

「い」：尾張國中嶋郡[現在の愛知県中島郡](IV巻)の項に見られる。図や説明からみて、明らかに環形動物門多毛綱(イソメやゴカイの類)の一種である。なお、同国朝倉村の項にも「い」(同巻)があるが、図や説明はない。

「キ」：周防国(VIII巻)の項にある。巻頭色グラビアで再現された図およびその説明原文の範囲では、明らかに *U. uncinatus* としてよい。周防国岩国(IX巻)にも出るが、こちらには図や説明がない。

「いむし」：信濃国(III巻)の項に見えるが、図や説明は付されていない。信濃には海はないから、陸棲ないし陸水棲のものであろう。また、対馬国(XI巻)の項には3ヵ所に出てくるが、少なくとも1ヵ所では「陸虫」として分類されている。これらは *U. uncinatus* とは思えない。『古名録』²⁸⁾に「以[いの変体仮名]ノ形鼠婦[マメムシと振る]

ニ似タル物ナルヘシ」と書かれた「い(むし)」かもしれない。鼠婦という中国名をもった動物は多くの本草書において伊威(いる)という和名の動物に同定されたが、これは一般に節足動物門甲殻綱等脚目のワラジムシ類と考えられる。明治初年に文部省が発行した『小学掛図：動物第四多節類一覽』にも「ワラジムシ鼠婦又伊、蟻／又オメムシと云フ…」とある(唐澤²⁹⁾による)。

以上から、江戸中期にある地域において *U. uncinatus* が「キ」、環形動物門多毛綱のあるものが「い」と呼ばれていたのは確かである。

ところで、キと呼ばれていた動物が江戸時代には(猪以外にも)複数いた可能性がある。というのは、1827(文政10)年成立の『動植名彙』³⁰⁾において、「巻七蟲類」と「巻九貝類」の両方に「ゐ」の見出しがあり、上記蝙蝠の件も両者に引用されているからである。もっとも、諸書に頻繁に引用される『延喜式卷三十九内膳司』³¹⁾の「年料…尾張国。為伊二擔二十壺。」という記事は、ここでは「貝類」の項目においてだけ見られる。この「為伊」は、食用ともなる *U. uncinatus* かもしれないが確証はない。一方、「蟲類」に分類された「ゐ」は、上で触れた尾張國中嶋郡の産物帳にあるような多毛類ではあるまいか。なお、鼠婦はどうかといえば、『動植名彙』「巻七蟲類」において「おめむし」の項目に入れられているので、ここでの考察に関するかぎり除外してよい。これ以上の詮索は他日を期したい。なお、『動植名彙』とほぼ同時代の『物品識名』・『同拾遺』³²⁾や『本草綱目啓蒙』³³⁾には、キ、ユあるいはそれに類した日本語名称は見いだせない。

4. 尾張本草学者の稿本から

江戸末期から明治初めに尾張で活躍していた本草学の結社「嘗百社」のメンバー大窪昌章(1802~1841)の著作『大窪蟲譜・乾』(写本：国立国会図書館蔵、登録番号/特7-62)には、「イト云虫 熱田海ヨリ上ル コマカモノノ内ニアリ 皮ザラザラスルモノサイノゴトシ」(34丁裏)との説明とともに、ナマコ類に属するグミの一種と思われる2個体の動物が描かれている。口らしきものの周囲に触手とはっきり認められる突起が描かれているので、これらは明らかに *U. uncinatus* ではない。もっとも、グミの類そのものを「イ」と呼んだのか、*U. uncinatus* と混同したのかは定かでない。また、雀巢庵 吉田平九郎(1805~1859)の著作『蟲譜』(国立国会図書館蔵、登録番号

／特7-178)には、*U. uncinatus*と思われるリアルな外形図が載っているが(19丁裏)、残念ながら文字は一切記入されていない。

大窪の同好の士で、幕末から明治に活躍した伊藤圭介(錦窠と号する、1803-1901)の著作ではどうだろう。『錦窠魚譜』の巻号不明の一冊(国立国会図書館蔵、登録番号/別11-11-17)に、「蝦夷フレチ説」と題され、末尾に「文久壬戌[1862年]冬日錦窠伊藤圭介識於市谷邸舎」と記された一章がある。草稿とその清書からなり、いずれも冒頭に、「蝦夷舍利浜ニテ寒風暴波ノ候赤色蚯蚓[ミミズ]ノ如キ物ヲ海岸ニ打揚ル事アリ此品方言フレチト称ス…多気志楼主人ソノ乾腊ノ品ヲ余ニ贈レリ…」と記されている。文中の多気志楼主人とは、蝦夷探検で有名な松浦武四郎のこと。続くページにある圭介の孫伊藤篤太郎による1940年のメモに示唆され松浦の「戊午知床日誌」³⁴⁾を紐解くと、1858(安政5)年初夏の北海道東部探索中に会った「フレチ」の正体について、松浦は何人かに問い合わせていたことがわかる。『日誌』には阿部喜任、山本錫夫、そして圭介の回答が紹介されているが、ここから明らかに、上述の「蝦夷フレチ説」は松浦への回答の控えおよび草稿と判断される。

伊藤のこの「フレチ説」中に「キ或ハユ又ハアカユト称スルモノハ諸国海中ニ生シ漁者亦餌トシテ比目魚、[カレイと振る]棘鬣魚[鯛ヲ釣ル…]と書かれているのは、*U. uncinatus* のことであろう。彼は本種の呼称に、キとユの両方を認めていたのである。私のこれまでの探索の範囲では、これが、*U. uncinatus* とほぼ特定される動物に「ユムシ」系の名称が確かにあてられた最初である。「ユ」と似た呼称は地方名としても見られる。たとえば、1883(明治16)年3月東京上野で開かれた水産博覧会に出品するために三重県が作成した『三重県水産図解』³⁵⁾には、*U. uncinatus* とされる彩色図に添えて「ユウノ志摩国方言…三州地方ニ求メ鯛釣りノ餌ニ用ユ」と解説されている。「ユウ」は東京国立博物館蔵「動植物写生図・坤」(登録番号/和-919-2-2)にも登場する。すなわち、ホシムシ類の一種と思われる彩色図に添えて、「ユウニ似タルモノ相州横須賀産…明治18[1885]年5月4日」とある。さらに、森³⁶⁾の調査によれば1930年頃広島県下では、本種にアカユ(上記『錦窠魚譜』にも見える)、シロユ、ユを始め「ユ」系の名称が多数知られている。蜘蛛の「糸」のことを「イト」ではなく「イ」とか「ユ」とする地方もあるというのが³⁷⁾、ここで問題にしている

キとユの関係と平行的な現象かもしれない。

5. 本草学書探索のまとめ

以上をまとめると、(1)遅くとも平安時代以降、「キ」と呼ばれる動物が確かに日本で認識されていた。いくつかの異なった動物がそのように呼称されていた可能性はあるが、少なくともその一つは*U. uncinatus*であり、これを指す漢名としてはもっぱら「蚯蚓」が用いられた。(2)「蠶」という漢名は全く別の動物(昆虫類の繭らしい)を指していた。(3)江戸時代に「ユムシ」や「イムシ」と呼ばれる動物がいたことも間違いなく、この正体は不詳であるが、*U. uncinatus* ではないようである。(4)幕末には、*U. uncinatus* の呼称として、「キ」と「ユ」の両方が認められていたらしい。

したがって、本種の日本語呼称としては、文献記録に関するかぎり、「キ」(現代仮名使いでは「イ」)の方が「ユ」よりはるかに古いといつてよいであろう。

6. 明治以降の近代科学のなかで

1873(明治6)年から1877年にかけて文部省が発行した初等教育用『小学掛図：動物図』全5面(田中芳男著)のうち、1877年刊『動物第五柔軟類多肢類一覽』には、*U. uncinatus* が「井又タヒノエ 浅海ノ泥中ニ棲ム、其形蚯蚓ノ如ク…専ラ用キテ鯛ヲ釣ル餌トス」と解説されている(唐澤²⁹⁾による)。井はキと同じであり、*U. uncinatus* の和名が「キ」とされたことがわかる。田中は前記伊藤圭介の弟子にあたるが、伊藤が認めていた「キ」や「ユ」から前者だけを“文部省選定”の和名として認定した形になっている(文部省による教科書検定の開始はこれより少し後の1886年のことである)。ちなみに、環形動物多毛類の一種は、同じ1877年刊の『小学掛図：動物第四多節類一覽』に「ゴカイ又ユムシ」として掲載されている(出典同上)。魚釣りの餌とするからユムシなのである。こうした『掛図』用の教科書や解説書は“博物図教授法”といったタイトルでこの時期多数出版されたが、『掛図』にきわめて忠実な内容に終始している。

これ以降の出版物(主要単行書、および『動物学雑誌』全冊)をあたってみると、問題の動物群の総称として1885年に安本³⁸⁾は「キ(タヒノエ)属」を、そして1889年に飯島³⁹⁾は「棘尾(トゲヲ)類」をそれぞれ提唱したが、これらはその後ほとんど使用されなかった。一方、*U. uncinatus* という種に対して、飯島³⁹⁾は「蠶(キと振る)あるいはユムシ」と表記し、1894年高松⁴⁰⁾

は日本語名称としてこれらにユを加えて解説している。種和名としての「キムシ」は池田⁴¹⁾が初出だが、彼は「ユムシ」もこれに併記し、同時に彼の新種をサナダムシと命名し、この動物群の総称としては「ユムシ類」を採用している。その後今日までの歴史的経緯の詳細な記述と分析は誌面の制約のため省略するが、概要は以下のとおりである。総称としては蠅類が、たとえば蠅綱などとして採用されるのが飯島⁴²⁾以来通例となったが、漢字の読みは多くの場合明示されていない(振り仮名が付されている場合にはユムシ、イムシの両方がある)。1960年頃以降、総称としてはユムシ綱ないしユムシ動物とされることが多くなっている。また、種和名としてはユムシ・〇〇ユムシ方式とイムシ・〇〇イムシ方式がともに使用されてきたが、少なくとも最近では前者が後者を凌いでいるように思われる。たとえば『動物学雑誌』第69巻(1960年)から終巻である第92巻(1983年)において本動物群に言及している22編(多くは学会講演要旨)は、すべてユムシ方式であり、ほとんどの場合 *U. uncinatus* の名称としてユムシを用い、他にオオミドリユムシ等として使用していた。このような傾向を尊重して私はユムシ方式を採用した⁴³⁾。

7. むすびにかえて一蠅から蠅へ

すでに指摘したように、幕末までは *U. uncinatus* を表現する漢字としてはもっぱら「蠅」が用いられていたのが、明治になって、それまで別の動物(縊女すなわち昆虫の蛹らしい)を指していた「蠅」にとって替えられたのはなぜか。この答を私はまだ得ていないが、上記『錦窠魚譜』の巻号不明の一冊(登録番号/特11-11-21)に、その手がかりになりそうな記事が見つかった。

それは、ある広島県人から水産博覧会に干物として出品された“ドロボウ魚”(正体はメクラウナギらしい)に関する資料をまとめた「泥坊魚」と題する一章である。この冒頭に置かれた「[明治]十六[1883]年五月三十日田中芳男記」とする一節に「之[この干物]ヲ焼食スルニ…蠅ノ如ク頗ル美ナレドモ」(87丁裏)と記されている。振り仮名がないので読み方は不明だが、この蠅は *U. uncinatus* ではあるまいか(前述の『栗氏千蟲譜』の「煮食味美ナリ」を思い起こしていただきたい)。昆虫の帯蛹(縊女)が頗る美味とは考えにくい。田中芳男のこの文章は、飯島が文献上初めて蠅を *U. uncinatus* にあてた1889年よりもはるかに前

あるから、田中が蠅から蠅への転換に関与したとも推測できる。ただし、田中が編纂した1901年出版の『水産名彙』⁴⁴⁾には、蠅という漢字はどこにも現れない一方、「イキ」の見出しの下に「蠅[以下やや小さな活字で]為伊、為委(古)」と書かれている。(古)とは、出典が『古名録』²⁸⁾であることを示すが、これがすでに見たように「イキ」をワラジムシ類にあてたのだとすれば、凡例に「水産物ノ名称ヲ諸書ニ就キテ抄出」したとある『水産名彙』には不似合いである。やはりこの「イキ」は、栗本の意味の「蠅」すなわち *U. uncinatus* ではないか。この推定が正しければ、田中はこの時点で「蠅」の原義からの逸脱を悟って「蠅」を復活させたとも考えられる。いずれにせよ、『水産名彙』以降、近代科学の出版物において「蠅」を目にすることはなくなったのである。

稿を終えるにあたり、資料閲覧の便宜を図っていただいた国立国会図書館と東京国立博物館、『栗氏千蟲譜』の閲覧ならびに掲載をご許可下さった西尾市教育委員会、および、資料収集についてお世話になっている名古屋大学情報文化学部・人間情報学研究科・言語文化部合同図書室の各位に深謝する。

引用文献

- 1) 伊藤猛夫: 環形動物蠅綱, 新日本動物図鑑(岡田 要・内田清之助ほか監修), 上, 北隆館, 東京, 1965, pp. 576~581.
- 2) 文部省・日本動物学会(編): 学術用語集動物学編(増補版), 丸善, 東京, 1988, 1122 pp.
- 3) 山田常雄・前川文夫ほか(編): 岩波生物学辞典, 第3版, 岩波書店, 東京, 1983, vx+1404+349 pp.
- 4) 江崎悌三: 動物ノ学名, 改訂増補日本動物図鑑, 北隆館, 東京, 1947, pp. 1865~1874.
- 5) 荒俣 宏: 世界大博物図鑑, 第1巻蟲類, 平凡社, 東京, 1991, 569 pp.
- 6) 磯野直秀: 『千蟲譜』諸写本の比較, 参考書誌研究, (44): 1~20, 1994.
- 7) 中村頼里: 栗本丹洲『千蟲譜』の原初型について, 科学史研究II, (33): 85~87, 1994.
- 8) 栗本丹洲: 千蟲譜, 1811. [恒和出版1982年江戸科学古典叢書41による]
- 9) 大槻文彦: 大言海, 第4巻, 富山房, 1935, 964+59+4+8 pp.
- 10) 小西正泰: 吉田雀巢庵, 彩色江戸博物学集成(下中弘編), 平凡社, 東京, 1994, pp. 385~397.
- 11) 矢沢米三郎: 理科教授用動物図説明書第二, 金昌堂, 東京, 1902, 30 pp.
- 12) 諸橋徹次: 大漢和辞典, 巻10, 大修館書店, 東京, 1959, 38+12+1100 pp.
- 13) 東 光治: 動物和漢名の整理に就いて, 動物学雑誌, 53: 115~116, 1941.
- 14) 渡部 温(訂正): 標註訂正康熙字典, 講談社, 東京, 1977, 3602 pp.
- 15) 台湾商務印書館編審委員会(編): 増修辞源, 上・下, 台湾商務印書館, 台北, 1978, 10+6+2464+284+24 pp.
- 16) 辞海編纂委員会(編): 辞海(1979年版), 上・中・下, 上海辞書出版社, 上海, 1979, 4915 pp.
- 17) 李 時珍: 本草綱目, 1596. [人民衛生出版社1957年刊影印本による]
- 18) 源 順: 倭名類聚鈔, 931. [正宗敦夫編風問書房刊の1970年影印本による]
- 19) 岡西為人: 本草概説, 創元社, 大阪, 1977, 16+24+561 pp.
- 20) 深江輔仁: 本草和名, 918. [正宗敦夫編日本古典全集刊行会版(1978年現代思潮社復刻)による]

- 21) 丹波康頼: 康頼本草, 987. [『統群書類従』(同完成会編・刊), 1928, pp. 435-466による]
- 22) 編者不詳: 類聚名義抄, 成立年不詳 [正宗教夫編風間書房1962年刊影印本による]
- 23) 橘 忠兼: 伊呂波字類抄, 成立年不詳 [正宗教夫編日本古典全集刊行会版(1978年現代思潮社復刻)による]
- 24) 人見必大: 本朝食鑑, 1697. [平凡社1976-1981年刊東洋文庫による]
- 25) 貝原益軒: 大和草本, 1708. [岸田松若ほか註有明書房刊の1978年版による]
- 26) 安田 健: 江戸諸国産物帳—丹羽正伯の人と仕事, 晶文社, 東京, 1987, 139 pp.
- 27) 盛永俊太郎・安田 健(編): 享保元文諸国産物帳集成, 科学書院, 東京, 1985~.
- 28) 畔田伴存: 古名録, 1843. [杉本つとむ編早稲田大学出版会1978年刊影印本による]
- 29) 唐澤富太郎: 明治初期教育稀観書集成(2)解説, 雄松堂書店, 東京, 1981, 78 pp.
- 30) 伴 信友: 動植名彙, 1827. [伴 信友全集(市島謙吉編), 第5, 国書刊行会, 東京, 1909, pp. 319-517による]
- 31) 藤原忠平: 延喜式, 第三十九, 927. [正宗教夫編日本古典全集刊行会版(1978年現代思潮社復刻)による]
- 32) 水谷豊文: 物品識名・同拾遺, 1809・1825. [青史社1980年刊影印本による]
- 33) 小野蘭山: 本草綱目啓蒙, 1847. [平凡社1991-1992年刊東洋文庫による]
- 34) 松浦武四郎: 戊午知床日誌, 1863. [正宗教夫編日本古典全集刊行会版多気志楼蝦夷日誌集二(1978年現代思潮社復刻)による]
- 35) 東海水産科学協会・海の博物館(編): 三重県水産図解, 東海水産科学協会・海の博物館, 鳥羽, 1984, 342 pp.
- 36) 森 喬以・田村松太郎・牧野謙二: 広島県産主要餌虫類に関する調査書, 広島県水産試験場報告, 1-45, 1932.
- 37) 野元菊雄: ことばの誕生と変化, 日本の方言地図(徳川宗賢編), 中央公論社, 東京, 1979, pp. 99-139.
- 38) 安本徳寛: 動物書, 製紙分社, 東京, 1885, 1+2+229+8+3+2 pp.
- 39) 飯島 魁: 中等教育動物学教科書, 第1巻, 敬業社, 東京, 1889, 158 pp.
- 40) 高松榮太郎: 蠅, 動物学雑誌, 6: 142-143, 1894.
- 41) 池田岩治: ウミサナダの本体(新称サナダユムシ), 動物学雑誌, 13: 382-392, 1901.
- 42) 飯島 魁: 動物学提要, 大日本図書, 東京, 1918, 437 pp.
- 43) 西川輝昭: ユムシ動物門, 日本海岸動物図鑑(西村三郎編著), I, 保育社, 大阪, 1992, pp. 306-309.
- 44) 田中芳男・藤野富之助(編): 水産名彙, 大日本水産会, 東京, 1901, 8+88+34 pp.

(名古屋大学大学院人間情報学研究科環境情報論講座)

*

*

*

Abstract: An echiuran, *Urechis unicinctus* (von Drasche, 1881) is now called “Yu-mushi” or “I-mushi” as Japanese common names, of which “mushi” meaning a worm. A survey of ethnobiological and biological literature revealed that one or more Japanese invertebrate animals have been called “I” in Japan since Heian Period at latest, probably inclusive of this common echiuran species, and that toward the end of Yedo Period “Yu” was also employed as another name of the species. The sudden change of the Chinese name assigned to the species early in Meiji Period was also referred to.